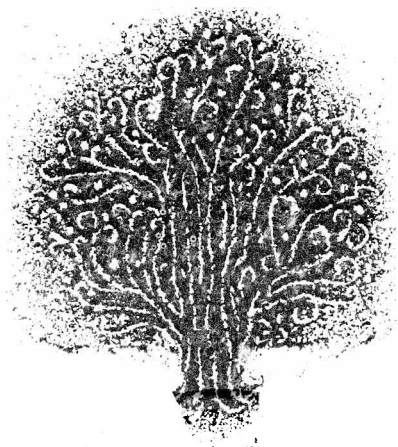


殺人者

原田康子



殺人者

原田康子

中央公論社

殺 人 者

© 1962

著 者 原 田 康 子

昭和37年6月10日印刷

昭和37年6月15日発行

発行者 宮本信太郎

印 刷 三 陽 社

発行所 **中央公論社**

東京都中央区京橋2-1

振替・東京34番

定価 330 円

検印廃止

殺人者

わたしはじめてその絵を目にしたのは、梅雨の季節、六月なかばのある午後だった。

その午後、わたしは銀座にいた。朝から降っていた小雨は一応あがっていたが、空はまだ低かった。雨滴がときどき街路樹の葉から落ちてうなじをぬらし、空気はなまあたたくくしめっていた。

わたしはハンドバッグを軽くゆすってゆっくり歩いていった。人と逢う約束も買物の予定もなかった。小路から小路へとぼんやり歩いていただけである。

わたしのまわりにはわたしとは縁のなさそうな人々の流れがあった。空を不揃いに噛んだビルの稜線があり、ひかったショーウィンドーがあり、それから電車や自動車のきしみ、人々の靴音と無数の会話とで成りたった巨大な機械の唸りのような街のざわめきがあった。

わたしはすこし疲れていた。呼吸がみだれ、膝頭がだるかった。わたしの枕元からバスの大箱が消えて一月とはたっていない。恢復後じめて出た銀座なのだ。銀座ばかりとはかぎらない、新宿でも渋谷でも盛り場の細い通りをゆっくりぶらつくのは病後のわたしのたのしみのひとつだった。疲労も大して苦にはならない。疲れてくると、どこか遠い外国の街の小路にまぎれこんだような気分がする。この東京が、透明なまぼろしの街のように目にうつることさえあった。

わたしの心に安堵とたのしさとがひろがりだすのはそういうときだった。現実があるがままだと受けとることなどわたしの得手ではない。わたしが病身であるということ、二十一歳になった娘だということ、恋人も許婚者^{いいなすけ}もいないということ、身についた学問も技術もなく、野心も目的もなく、無為徒食の毎日をくりかえしているということ、この現実^{じじつ}に視線をあてたりしてはきれいになったばかりの肺臓のためによくない。まぼろしの通りをさまよっていたほうがはるかにましだった。

けれどもさまよいつつづけていると、疲労^{えんぱう}困憊^{こんぱい}のあけく信号機を見あやまるおそれがあった。そこでわたしは、足元がややしくなると文無しでもやすめる場処^{ばしょ}に入って行く。たとえば駅の一等待合室や航空会社のあかるいロビー、デパートの屋上、せいぜい奮発^{ふんぱつ}してデパートのコーヒー・スタンドである。お小遣いが潤沢ではないのだ。

画廊もそういう場処のひとつだった。銀座には画廊がいくつもあって、たいていの画廊には応接セットの用意がある。シュミーズを売るような具合に絵を売るわけにはゆかないせいかもしれない。むしろ肘掛け椅子にからだをうずめていても、追いだされる心配はなかった。

銀座へ出て一時間ほどたったころだった。一軒の画廊の扉がふとわたしの目を引いた。

そこは新橋寄りの西銀座の裏通りだった。泰西堂というかすれた金文字が、画廊の細い磨^{すり}ガラスの扉に入っていた。わたしにははじめての店だった。がっしりした洋酒店と、帽子屋のしゃれたウィンドーにはさまれた間口のせまい画廊で、年中陽があたらないように扉のまわりの化粧煉瓦がしめっていた。扉のまえの舗道^{ほどう}の石もしめり、扉からもれる照明燈のあかりが、敷石のへりをひからせていた。わたしは何気なく泰西堂にすべりこんだ。間口の割には奥行きが深く、ほかには誰の姿もなく、透明な照明が壁にならんだ絵をひっそりとてらしだしていた。突きあたりが事務室らしく、くすんだ苔色のカーテンが小さな入口にかかっていたが、そこにも人気はないような静けさだった。もっとも、

高価な絵を扱う画商たちは、馴染みの客が声でもかけなければ店には顔を出さない。わたしが気楽にドアを押すのもそのせいなのだ。

目的の椅子は入口近くにあった。卵色のすわり心地のよさそうな肘掛け椅子だった。わたしはろくに絵も見ずに椅子に腰をおろそうとし、壁の中ほどの一枚の絵にふと目をとめると、すこしずつ目を見ひらいてその場に釘づけになった。真青な夏空がわたしのまえてかがやいていた。

それはカンバスを縦につかった八号の油絵である。赤褐色の岩石がころがる草ひとつない荒地と、そのうえにかがやくライト・ブルーの空で二分されたごく単純な構図の風景画だった。地平線のあたりに屋根の細いかたむきかかった白亜の建物が点のようにひとつおかれ、それが画面を引きしめていた。作者は角田喜八、〈スペインの空〉という題がついていた。

わたしは十分間も〈スペインの空〉のまえにぼんやり突ったっていたような気がする。椅子にすわってからも、わたしの心臓の鼓動は大きな音をたてていた。

わたしには絵画についての知識は少ない。椅子が目当てのわたしである。美しいと感じた絵に見入るだけなのだ。角田喜八の名もろおぼえに知っていたけどだった。国際賞を二度ほどうけ、最近ヨーロッパから帰ったばかりだという彼の経歴は、あとで調べてわかったほどである。

〈スペインの空〉がわたしの心をうばったのは、その絵にみなぎっているはげしさだった。絵の具を厚く盛りあげた青一色の空には、太陽のひかりがあふれていた。岩肌は赤く灼け、ひかりをはねかえし、降りそそぐひかりとぶつかりあって、遠くの廃屋のとがった屋根をもえあがらせていた。そのひかりと熱は六月の東京にないものだった。そのはげしさはわたしの日常にないものだった。しまいは夜の荒地のありさままでがわたしの目にうかんだ。そこにあつまる男女の真黒な目のきらめき、わたしの耳でゆれる大きな耳飾りと指先で鳴るカスターネット、男たちが弾くフラメンコのひびきや彼等

の腰を飾るすどい短剣などが。

泰西堂に入って二三十分あとに、あらたな客がひとり入って来た。画学生らしいベレー帽の青年だった。

画廊にあらわれる人種はだいたい三通りにわかれているとわたしは考えている。第一は絵と直接むすびついて生きている人たち、画描きとか画描きの卵などだ。第二はわたしのような暇だらけの風来坊。そして最後は、買う気の充分にある資力を持ったコレクターたちだ。

わたしはベレー帽の青年をみとめた瞬間ほっとした。すでにわたしは〈スペインの空〉に執着を持っていたのだ。

そのときからわたしは落着きを失った。コレクターの誰かが、〈スペインの空〉を持ちさって行く事態をわたしはおそれたのだ。あたらしい客が入って来るたびに、わたしはぎくりとして素早く客の品定めをした。むろん右から左へと絵に買手がつくわけはない。けれども、とつぜん買手がつくのも絵の運命だった。

夕暮までの二時間あまり、わたしは泰西堂を芯にした一町四方ほどの界限を何度もうろつきまわった。店の椅子にお地蔵のように腰をすえて絵を見張っているのもいらだたしい。しかし、一步おもてに出ると、早くも〈スペインの空〉のうごきが気になりだす。足も地につかず、わたしはあわてふためいて泰西堂にとってかえす。そのくりかえしだった。

そのあいだ、わたしの頭をなやませていたのは絵の値段である。あいにくと、絵には正札などついていない。絵の相場もわたしはよく知らなかった。すこし名のおった画家の絵になると、号二三万はするといふくらいに知識しかなかった。角田喜八も、その日まではわたしにとってすこし名のお

った画家のひとりだった。号三万とみて、八号の《スペインの空》は二十四万円ということになる。暗算しただけで、わたしは大きな溜息をもらした。母が月々わたしに渡してくれるお小遣は二千元である。ネスコーヒーの小びんをひとつ買うと、煙草代と電車賃がかるうじてのこるだけだ。寝ついているあいだはむろん一文も貰えない。二十四万どころか、二千四百円の絵でもわたしの手に入る可能性はない。そう思うとかえって、わたしは《スペインの空》がほしくなった。

わたしはときどき舗道に足をとめて、父の会社のある丸の内の方角へ目を投げた。かさなり合ったビルの上に煙色の雲がひろがっていた。そのくすんだ建物のむれと雲の色はわたしの氣持を滅入らせた。父に電話などしても無駄だとわたしは百も知っていたから。

わたしが発病したのはなにも今度が最初ではない。この五年のあいだにわたしは五度発病し、五度癒った。最初に発病したのは六年まえの早春、高校二年に進級するまぎわだった。病状はひどくはなかった。左肺に金花鳥のくちばしで突ついたていどの空洞ができていたのだ。心臓にすこし欠陥があって、わたしは手術のできないからだだった。

これまでの五年間に、父がわたしのために支払った療養費は大きい。野尻湖のそばに建てた山荘ひとつだけでも、相当な額にちがいない。そのうえわたしには不始末を引きおこした経験がある。しかも一度ではない。療養所からの脱走が二度、家出の真似が一度、駈落ちの真似が一度、われながら顔の赤らむ出鱈目さ加減だ。

母がわたしにつとめて現金を持たせまいとするのも当然だった。けれども、決して両親への反感からしかした不始末ではない。わたしにやさしい母も、わたしにきびしい父も、わたしはひそかに、ほとんど無意識のうちに愛している。自分でもうまく説明のつけようがない、恢復期の不安定な心の状態から、つい引きおこした間違いだった。

わたしは最初の恢復期をむかえたのは、南アルプス山麓の蓼科に近いある療養所である。五年ほどまえの十一月である。熱が引き、呼吸と脈搏とが規則ただしくかわっていった、医者があかるい声で退所の日取りをわたしに知らせたとき、わたしは受けとったものは安堵でもよろこびでもなく、戸まどいであり、かすかな失望だった。わたしには療養所を出たあとの暮しの目安がつかなかったのだ。わたしのクラスメートは、わたしの発病後二年に進級していた。すでに二学期の終りだった。もとのクラスに復学するわけにはゆかない。四月まで待って一年下のクラスに編入するほかはなかった。それはいやだった。落第が恥ずかしいのではない、物理も数学も英語も、勉強などわたしは二度としたくはなかったのだ。病気がわたしを怠け者にかえていた。

友だちや校舎もさっぱりなつかしくはなかった。わたしが通っていたのはミッシェン系のある女子学園の高校部だ。母の母校だという理由からである。生徒たちには、わたしと似ためざまれた環境の娘が多い。娘たちの心にひそんでいる特権意識、娘たちの言葉づかいと笑い声とネクタイのむすびかたと歩きかた、すべて鼻持ちならぬものとしてわたしはベッドのなかで思っていた。男の影すらない娘ばかりの学園の雰囲気も、息ぐるしく思いだされた。せいぜいなつかしくよみがえったのは、礼拝堂の石のイエズスの、肋骨のあたりにあった小さな傷ぐらいのものだ。けれども、男女共学の都立高校へ進めばよかったとわたしはぐくやんだのは、実をいうと発病後のことだった。列からはずれたという意識が、わたしをひねくれ者にしたのかもしれない。それとも結核菌がわたしの脳味噌のうごきをいくらかまともなものにしてくれたのかもしれない。

いずれにせよ、わたしは断じて学校にはもどりたくなかった。ではどうしたらいい？　こたえはでなかった。わたしは個室の窓にはめこまれた南アルプスのするどい稜線を終日ぼんやり眺め暮して退所の日を待っていた。山々は雪をいただいていた。

いまでもわたしは、五年まえの初冬のある朝の瞬間をよくおぼえている。それは退所の日を二日後にひかえた早朝だった。その朝わたしは、前後の考えもなく、ふらりと療養所を抜けだしてしまったのだ。持物はほとんどなかった。ハンカチーフが二枚と二千円近くの現金がハーフコートのポケットにあっただけだ。山でかこまれた空が薄赤かった。八ヶ岳のへりにもばら色の光沢があった。空気はガラスのようにつめたく、わたしの吐く息が白かった。わたしは療養所のまえの通りを駆けだしながら、なにかの灌木の枯枝をつかんだ。枝は硬い音をたてて折れた。わたしの心に安堵がさわやかにひろがり、わたしは息を深く吸いこんだ。

わたしが（スペインの空）をなんとしてでも手に入れたくなったのは、恢復期をまたむかえたせいかもしれない。しかし、そう考えたのはあとになってからだ。その日のわたしはひたすら（スペインの空）を欲し、買手がつくことをおそれていた。

わたしが警戒していたタイプの客は、五時近くに泰西堂に入ってきた。たぶんわたしが六度目か七度目に泰西堂にもどった直後のことだ。日の長い季節だったが、曇り日で、街にはあかりがつきはじめていた。

客は二人連れの初老の男だった。二人とも恰幅かつぷくがよく、額がはげあがり、顔の色艶は申しぶんがなく、一目でふところのあたたかなコレクターだとわかった。一人は灰色の上着、一人は薄茶色の上着だった。

わたしは思わず腰をうかし、あわてて椅子にすわりなおした。二人の客はわたしには目もくれずに、ゆったりした足取りで目的の絵えをほうへすすんで行った。目のこえた買手は端から順ぐりに見まわったりせずに、たいていは目的の絵にまっすぐむかう。目星をつけてあったか、入口で勘がはたらくか

である。二人の肩のあいだに《スペインの空》が見えかくれしていた。

わたしは息をつめ、からだを動かして、二人の大きな背を見守っていた。客は《スペインの空》の右横で足を停めた。やはり角田喜八の作品だった。《スペインの空》とはちがい、しずんだ色合いの《ミラノの辻》という十号の風景画である。わたしの肩から力がぬけた。たとえ角田喜八の絵であっても、《スペインの空》のほかは、わたしにはどうでもよかったのだ。

「角田はいいね」

灰色の上着の客が言って、《スペインの空》に目を走らせた。わたしはぎくりとしたが、二人とも一応全部の絵を見まわしただけだった。

苔色のカーテンがゆれて、店の人間がはじめて顔をだした。おおかた耳さとく、客の声を聞きつけたのだ。すらりとした、細おもての四十年輩の男だった。顔だちは悪くはなかったが、雨の日の化粧煉瓦のようなおもむきがあって、やや薄い眉の下に抜け目のなさそうな目があった。彼はその目で紙屑でも見るようにわたしを見た。わたしは彼の耳を見た。べつだん異様な形の耳ではなかった。あとでこの人物が泰西堂の支配人だとわかった。

客は支配人と馴染みだった。支配人は二人に等分に微笑みかけながら近寄ると、灰色の服の客にものやわらかく話しかけた。

「そろそろお決めになってよい頃ですよ」

「六だったな」

「はあ」

「リザーヴしとこう」

と客は《ミラノの辻》を顎でしゃくった。たいへん鷹揚な声音であり、身のこなしかった。わたし

の頬が熱くなった。わたしがネスコーヒーを買うときよりも無造作に、客は十号の角田喜八の絵を予約してしまったのだ。《スペインの空》もこういう具合に、金持ちどもの部屋にはこびこまれないとはかぎらなかった。

客は手短かに話しをきめて画廊から出て行った。支配人が二人を送りだした。わたしはくちびるを引きむすんで扉をみつめ、事務室へもどりかけた支配人のまえにいきなりすっと立ちあがった。

「あの……」

とわたしはかすれた声で言い、《スペインの空》を指さした。

「あれをください」

わたしが自分の言葉におどろいたのと、支配人が軽く目を見張ったのは同時だった。つぎの瞬間、支配人は素早くわたしを見まわした。一目でふところ具合を見ぬかれたようで、わたしは足がすくんだ。わたしの指には宝石ひとつない。金目のものといえば叔母から貰った象牙色のハンドバッグだけである。バンドつきの白っぽいレーンコートも平たい靴もありふれていた。サイズがわたしの細いからだに合っているというだけである。そして一度も美容師の手をわずらわせたためしのないようなじで切りそろえた髪、口紅も頬紅もない蒼白い顔、ときどき血管がすくみえる顴^{ほおほね}、それからわたしの若さ、どこから見ても絵の買手にふさわしい風態ではなかった。

「あれでございますか」

支配人はいんぎんに問いかえした。彼の口元にわたしを小馬鹿にしたようなほのかな微笑がただよっていた。

「うちでは現金でお引取りいただくことになっているんですよ。小切手で結構ですがね。あれは四十八万でございます」

わたしはつばをのみこんだ。角田喜八の絵は号六万だったのだ。わたしの頭の片隅に、さっきの客の「六だったな」という言葉がよみがえった。支配人はわたしのおどろきをたのしむように皮肉なやさしい声で、角田喜八の絵はここ数年値あがりをつづけ、まだあがりつつけるだろう、と言っていた。

「お買いになって損なものではありません」

「取っててください。二三日中にまいります」

とわたしは早口にたのんだ。相手の態度にわたしはすっかり分別を失っていた。

「たしかにいらっしゃいますか？」

わたしは無言で目をひからせた。

「目をつけてるかたもいらっしゃいますからね」

支配人は見えすいた言いわけをしてわたしの名をたずねた。

「洲本です」とわたしは不機嫌にこたえた。

「洲本淳子……」

「お電話は？」

「ありません」

三日後にふたたび泰西堂の扉を押せるかどうかは皆目わからなかった。わたしの手のひらは汗でしめっていた。

泰西堂を出たとき、わたしの頭を占めていたのは三日のうちに四十八万円をそろえ、あの無礼な支

配人に突きつけて「スペインの空」を泰西堂から持ちださねばならないという考えだった。腹だたしさのあまり、わたしは「スペインの空」の美しささえ忘れていた。かといって、たやすく手にできるような四十八万円ではない。四十八万円にしる二十四万円にしる、わたしにとっては天の星とひとしかった。

わたしの家は市ヶ谷の台地に建っていた。車一台通れるていどの細いゆるやかな坂道にのぞみ、道の両がわはいずれも石塀を高くめぐらした邸宅である。

門には鉄の扉ががっしりはめこまれていた。洲本臣平という名の標札がそこに出ている。それが父の名である。父の肩書きは東邦バルブ社長、ほかに八つ社長の肩書きを持っており、平取締役の肩書きはかぞえてみたこともない。すべて祖父から引きついだ仕事であり、肩書きである。

わたしの部屋は二階の南がわにある。左が弟の部屋、右が妹の部屋である。夜、窓ぎわに立つと目に入るのはいちめんのあかりである。近くの台地のなにやら閉塞的な匂いの濃い邸宅のほのかな窓のあかりから、遠くのうす赤い地平線まで街はあかりにうめつくされている。微光をはなっている恐竜の背のようであり、そのおびただしいあかりはここに生きている人間のおびたしさをふっとわたしに思ひださせる。ときにはまた、そのたくさんの人々のなかにわたしを理解しているものは一人もなく、わたしが理解したいとのぞんでいる相手もないのだということも。

しかし、この夜のわたしにはそんな感傷にふけるひまはなかった。わたしは父の小切手を無断で振りだすことを考えていた。小切手でもいいと言った支配人の言葉がわたしの頭にのこっていた。

小切手帳と印鑑のありかは父の上着の内ポケットとたいていきまっていた。父は帰宅すると夜ふけでも着替えをし、ほうじ茶をいっぱいすすって湯殿へ立つ。そのあいだに上着は母の手によって洋ダンスへしまわれる。父と母の寝室は階下の和室で、洋ダンスは次の間にあり、寝室の小机のうえの文

箱にサインがわりにつかうゴム印がある。母は上着の始末をすると、ねえやの手など借りずにキチンに立ってお茶漬の用意をする。ときには果物の皮をむく。それが健康で活動的な父と、やさしくて貞淑な母の長年のしきたりだった。

わたしはその夜のうちにその習慣を利用した。父が湯殿に姿を消し、母がキチンに立ったのを見まして、わたしは両親の寝室にしのびこんだのだ。むろん立派なおこないではない。わたしが思いとどまることができなかったのは、支配人の皮肉な笑顔と（スペインの空）のかがやきが、絶えず目にちらついていたからだ。小切手帳を手にするまで、わたしは心のどこかで小切手帳などみつからねばよいとねがっていたほどである。

運悪く小切手帳も印鑑もゴム印も難なくみつかった。わたしは父を不用心すぎると思った。泥棒が入ったらどうするのだろうか？　だが、わたしはたいして落着いていたわけでもない。わたしはゴム印に朱肉をつけそうになってぎくりとした。わたしは蟹のように小机におおいかぶさり、ゴム印の下に朱印を捺すと、小切手を割きとって部屋着のポケットに突っこみ、七ツ道具はそれぞれもとの場処にかえた。洋ダンスの戸のきしみが大きく耳にのこった。わたしは自分の部屋に引きかえしてから四拾八万円也と小切手に書きこんだ。手首がふるえ、なめらかな紙にペン先が二三度引っかかった。

翌日の午前中に、わたしは小切手をハンドバッグにしのばせて泰西堂にむかった。小切手をつくりあげたからには、すこしでも早く支配人にわたし、（スペインの空）を手にしたほうがましだった。小切手を受けとるときの支配人の表情を思いえがき、わたしは電車のなかでときどきしのび笑いをもらした。

午前の泰西堂はまえの日よりも一層静かだった。照明燈のせいか夕暮れの気配だった。そしてあたりの銀座裏はまだ夜あけだった。人通りは少なく、空気が重くしめっていた。（スペインの空）だけが